

「臨床看護にケアを取り戻そう part2」

世話人 茂野香おる

COVID-19の感染拡大により医療提供体制の根幹を揺るがす事態となり、「ベッドサイドの何でも屋」を引き受けざるを得ない状況が生じ、また、感染者が必要な医療を受けられない現状を目の当たりにするなど、さまざまな苦しい状況におかれている看護師諸姉からの悲鳴は心にいたく刺さる。この状況のなかで、我々が推進する熱布（綿タオルを適量の熱湯を浸み込ませたもの）を用いた「心地よさをもたらすケア」の普及に逆風が吹くと危惧していたのだが、『COVID-19の患者さんだからこそ！』と熱布を用いた「心地よさをもたらすケア」を、組織を挙げて推進している看護師たちがおり、勇気づけられる経験をした。彼女たちの活動にフォーカスしてみたい。

世話人所感 No.4「臨床看護にケアを取り戻そう」で、薄っぺらな使い捨ての不織布おしぼりがベッドサイドを占拠し、患者に心地よさを提供できないばかりか、冷たさと不快感を与えることになってしまっていることを述べた。しかも、看護補助者によりおしぼりが配られるだけで看護師が直接的に患者のケアに関わることがない現場も多い。COVID-19以前から、感染予防対策という医療安全偏重主義による綿タオル排除の波が押し寄せ、看護ケアが後退していたのだが、未知の感染症発生によりますますこの傾向が強まると考えられた。しかし、COVID-19感染者を看る現場で、思いもよらぬ事が起きている。

A病院 COVID-19 受け入れ病棟の看護師たち。未知の感染症ゆえ、患者との距離をとることや接触時間を最短にするよう指示され、2020年の患者受け入れ直後はそれを固く守っていたというが、PPE等感染防護策を遵守していれば感染することがないという自信をもった彼女たちは、治療の決め手がない状況のなかで看護として何かできることはないか模索し始める。人工呼吸器とECMO（人工肺装置）に頼らざるを得ない重症者は鎮静下におかれ、コミュニケーションもままならないため、その方たちへの看護は装置の管理とバイタルサインズのチェックが中心になりがちである。そんな状況を打破するための策として、急性・重症患者看護専門看護師のaさんは「熱布バックケア(前述の熱布を腰背部に貼布・マッサージを行うケア)」を思い出した。COVID-19患者の呼吸機能改善のために下肺野の肺胞を活性化する伏臥位療法が行われることが多いが、その間空いている腰背部に着目したのだ。そこで、世話人の川嶋・内山・茂野が所属する熱布バックケア普及プロジェクトが講習会講師として招聘された。看護師として少しでもCOVID-19患者に関われる術（すべ）があるなら教えてほしいと、藁をもすがる思いで多くの看護師たちが講習会に参加した。1回の講習会に15-16名（部署の約半分）の看護師が参加し、熱布バックケアの施術と被験者の両方を経験し、その心地よさを実感した。看護師たちは、早速、日常のケアとして取り入れていった。その影響が次々と報告された。腹臥位での熱布貼布中に酸素飽和度の数値が改善した例、また、呼吸器装着には至らない中等症の患者に実施したところ、重症化（気管内挿管による人工呼吸管理）に至らずに回復した例もあったという。なにより、好ましいのは、

無力感に陥っていた看護師たちが、この方法を取り入れて以来、患者と関わっているという実感が持てたということだ。

ケアの効果は、この施設にとどまらなかった。系列の病院の看護管理責任者が情報交換する中で、COVID-19 看護に腹臥位と熱布バックケア（＝ワンセットケア）が功を奏しているとの情報を得た B 病院（実は COVID-19 のための臨時医療施設）に波及した。そこで、A 病院の a 看護師が講師として招聘され、我々熱布バックケア普及プロジェクト（現在はワンセットケア普及プロジェクト）もお手伝いに入った。

B 病院における講習会でもケアを受けた看護師たちの反応は「すごくきもちがいい。患者さんにやってあげたい」「これをやってもらった患者さんは安心できると思う」「患者さんがたとえ咳をしたとしても安心して近づける」など前向きで、講習会の翌日からケアを取り入れたとのこと。聞くところによると、COVID-19 に罹患した患者さんの自責の念は想像以上に強いらしい。感染者ゆえに孤独になり自分を責め、自身の殻に閉じこもり寡黙になっている人も多いそうだ。そのような患者さんにワンセットケアを行うと、看護師が近くにいること、背部に感じるタオルの温かさに感謝され、徐々に自身の不安を話し始めてくれるという。考えるに、何よりも看護師の温かさがタオルを介してじんわりと伝わって身も心もホカホカしてくるのだと思う。それゆえ、自然と患者のコミュニケーションチャンネルが開かれ、安心した気持ちになれるのだと思う。不安な気持ちが体を硬直させ、おのずと呼吸も浅くさせて酸素化を悪くするが、ワンセットにより看護師にケアされることで安心感と心地よさがもたらされ、呼吸にも良い影響をもたらすこととなると考えられる。ちなみに、B 病院では中等症の患者専門の入院機関で人工呼吸器を装着している人はいないため、腹臥位といってもテーブルに伏す形の起座位の体位を指しており、その目的は背側肺胞の活性化・無気肺予防である。

COVID-19 患者へのワンセットケアを実践している 2 施設に関わらせていただき、感じたことは、この危機的状況を逆手にとるように、看護の本質を取りもどし、看護本来の持つ力を発揮していった看護師たちの力強さである。COVID-19 には決定的な治療薬がないから看護も何もできないのではなく、治療法が確立してないからこそ、看護の力が発揮できる好機になりうると思う。

心地よさをもたらし、人間の身体が備え持つ自然治癒力を引き出す看護独自のケアの普及活動に邁進するとともに、患者さんのためにいろいろと模索し、頑張る看護師諸姉を応援し続けていきたい。

【広めよう！ 熱布バックケアプロジェクト】

ホームページはこちらから 

